

日本フランス語フランス文学会

2022 年度春季大会

2022 年 6 月 4 日 (土)・5 日 (日)

会場：立教大学 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

大会本部：立教大学仏文・仏語教育研究室 Tel：03-3985-3647 Mail：rikkyo2022sjllf@gmail.com

(お問い合わせは、なるべくメールでお願いします。)

■今大会は対面で開催します。ただし、新型コロナウイルス感染症再拡大等の事情によりオンライン方式に変更する場合があります。詳細は本プログラムの 5 頁をごらんください。

■大会費：無料

■事前登録(重要)：検問があるため事前登録が必要です。こちらのリンクから必ず 5 月 29 日(日)までに行ってください。URL：<https://forms.gle/v6zw91UbqM8R766k8>

■非会員で参加を希望される方は、お名前とご所属を 5 月 22 日 (日) までに本大会実行委員会 (rikkyo2022sjllf@gmail.com)宛メールでご連絡ください。

■一般控室 5 号館 1 階 5122 教室 賛助会員展示場 5 号館 1 階ロビー

■委員会・役員会については、各委員長・幹事長より連絡いたします。

■大会参加にあたり招請状の必要な方は学会事務局 (sjllf@jade.dti.ne.jp) までご請求ください。

■懇親会は、状況に鑑み開催されません。

第 1 日 6 月 4 日 (土)

幹事会 10:40 - 10:50

役員会 10:50 - 12:00

開会式 13:30 - 13:45 5121 教室

司会 関 未玲 (立教大学)

開会の辞 澤田 直 (立教大学)

開催校代表挨拶 河野 哲也 (立教大学文学部長)

会長挨拶 小倉 孝誠 (慶應義塾大学)

ワークショップ 14:00 - 16:00

1. 日本の学生が選ぶゴンクール賞——総括と展望

5222 教室

2. 北米大陸におけるフランス語文学——ケベック

文学の現在 5221 教室

特別講演 16:30 - 18:00 5121 教室

William MARX (Collège de France)

Pour une bibliothèque mondiale

司会：澤田 直 (立教大学)

第 2 日 6 月 5 日 (日)

研究発表会

第 1 部 10:30 - 11:35

第 2 部 13:10 - 14:50

総 会 15:00 - 16:30

5121 教室

議長

寺田 寅彦 (東京大学)

閉会式 16:30 - 16:45

5121 教室

会長挨拶

小倉 孝誠 (慶應義塾大学)

閉会の辞

関 未玲 (立教大学)

■託児サービスについて

2020 年度より、大会での託児サービスは、託児所の開設ではなく、託児料金の補助に変更となりました。各自で託児所をご利用いただき、その料金について子ども 1 人につき 1 日最大 5000 円までの補助が受けられます。大会当日に受付で「託児サービス利用料補助申請書」にご記入いただき、後日、託児所の領収書を学会事務局に送付していただきます。

ワークショップ

6月4日(土) 14:00 - 16:00

ワークショップ1

5222 教室

日本の学生が選ぶゴンクール賞—総括と展望

コーディネーター：久保 昭博（関西学院大学）
パネリスト：今井 勉（東北大学）、小川 美登里（筑波大学）、
加藤 靖恵（名古屋大学）、倉方 健作（九州大学）

2021 年秋、「日本の学生が選ぶゴンクール賞」が始動した。これは、現在 26 カ国が参加する「国際ゴンクール賞」の日本版創設をフランスのゴンクール・アカデミーより打診された澤田直（立教大学）の呼びかけによって始まった企画である。2021 年 9 月 19 日に開催された第一回会合を皮切りに、運営組織の整備と「選考委員」となる学生の募集を進めた結果、10 月 24 日に開催された全体ガイダンスには、高校生から博士後期課程の学生にいたる 100 名以上の学生が選考委員志願者として集うこととなった。この人数は我々の予想をはるかに超えるものであり、フランス現代文学を原書で複数冊読むという無謀な試みに関心を示した学生たちのモチベーションの高さは、我々に嬉しい驚きを与えた。現在(2022 年 3 月)では、各地区に分かれた選考委員が 3 月 29 日に実施される最終選考会を視野に入れ、週 1 度程度の読書会を開催している。

本ワークショップは、このようにして始められた「日本の学生が選ぶゴンクール賞」の 2021 年度の活動を振り返ることを目的としている。各地区の責任者をつとめるパネリストが、それぞれの経験にもとづくこの活動の意義ならびに問題点を報告し、その後、会場の参加者も交えて意見交換を行う。精読に基づいたテキストの「正しい理解」を専ら追求する大学の講読とは異なり、フランス語のレベルや文学についての知識も様々な選考委員が、主にシノプシスをたよりに作品について自由に意見を交わし、それらの間に序列を付けるというこの「日本の学生が選ぶゴンクール賞」の現場で繰り広げられている状況は、我々フランス文学の研究・教育に携わる者にとっても、単に現代フランス文学の啓蒙普及に留まらない、文学作品との新たな付き合い方を示唆するものかもしれない。本ワークショップがそうした可能性(そして問題点)をともに考え、またこの企画を今後より豊かに展開する契機となれば幸いである。

ワークショップ2

5221 教室

北米大陸におけるフランス語文学—ケベック文学の現在

コーディネーター・パネリスト：小倉 和子（立教大学）
パネリスト：佐々木 菜緒（白百合女子大学）、河野 美奈子（立教大学）

カナダ・ケベック州は、圧倒的な英語圏である北米大陸にありながらフランス語を日常言語として維持している稀有な地域である。しかし、歴史的に見ると、そのような社会を安定的に維持するために多くの困難を乗り越えてきたことがわかる。1960 年代に「フランス系カナダ人」から「ケベコワ」というナショナル・アイデンティティに目覚め、「静かな革命」と呼ばれる近代化を短期間で成し遂げた人々は、現在では多くの移民を受け入れながら独自の間文化社会を構築することに余念がない。そこでは文学も大きな役割を果たしている。

本ワークショップでは、日本ケベック学会の会員でもある 3 名が 20 世紀後半以降のケベックの文学的状況を紹介する。まず初めに、佐々木が 1950～70 年代を代表する作家たちを取り上げる。この時期は、北米大陸という地理的空間とフランス系という歴史的空間のあいだのずれを積極的に引き受けようとする作品が登場した時期である。アンヌ・エペールを初めとする作家たちが表象する諸々の空間が作家自身や読者にどのように認識されてきたのかを検討し、あわせて、人間と人間を取り巻く環境の関係学にたいしてケベック文学（研究）がもつ可能性も探る。

次に、小倉が 1980 年代以降目覚ましい活躍をしてきた移住作家たちを取り上げる。中でも日系、ベトナム系のほか、20 代で独裁政権下のハイチからケベックに移住し、さらに現在はアカデミー・フランセーズ会員として「境界」の概念をすり抜けているダニー・ラフェリエールなどを取り上げ、これらの作家が間文化社会の構築に果たしてきた役割を論じる。

最後に、河野が今強い関心を集めている先住民文学、とりわけ、ケベックでもっとも大きな共同体を形成しているイヌーアの文学に焦点をあてる。ジョゼフィーヌ・バコンのようにイヌーア語とフランス語の 2 言語表記を行う作家もいれば、フランス語のみを使用する作家もいるが、世代も作風も異なる著者たちの作品の分析を通して、フランス語で書くことの意味を探る。

司会：澤田 直 (立教大学)

William MARX (Collège de France)

Pour une bibliothèque mondiale

Le monde semble désormais à notre portée immédiate. Un simple clic sur le clavier d'un ordinateur nous permet d'accéder de manière instantanée à l'ensemble de presque toutes les œuvres littéraires, sinon de tous les textes publiés sur tous les continents. Ce prodige technologique, dont nous bénéficions depuis une vingtaine d'années, se présente à bien des égards comme l'aboutissement d'un processus dont Goethe, au début du XIX^e siècle, avait su noter et décrire les prémices en forgeant le concept de littérature mondiale (*Weltliteratur*) : celui d'un échange généralisé des textes dans le cadre d'un marché mondial de la littérature, dont Karl Marx et Friedrich Engels constatèrent également les progrès. Cette littérature mondiale ou globale fait désormais l'objet d'un enseignement dans de nombreuses universités de par le monde.

Pour autant, la conception d'une littérature mondiale est-elle pleinement satisfaisante ? Ne fait-elle pas perdurer des phénomènes de domination culturelle et linguistique ? L'objet de cette conférence est de montrer que l'un des problèmes de la littérature mondiale est précisément lié à l'emploi du concept de *littérature*, qui nivelle les différences entre les cultures et a tendance à ramener les textes à un modèle unifiant, en gommant les altérités.

Il est possible de mettre en avant un concept beaucoup plus englobant et beaucoup plus respectueux des différences culturelles ainsi que de la dignité des diverses langues : celui de bibliothèque mondiale. Ainsi pourrions-nous proposer un modèle bien moins centralisé que celui de la littérature, et bien moins soumis aux phénomènes de domination.

La bibliothèque mondiale, dont la taille est presque infinie, doit être conçue comme un outil intellectuel exigeant d'émancipation généralisée. Elle récuse l'illusion de maîtrise et de totalité que produit l'idée de littérature mondiale par l'organisation de cette dernière autour de grandes œuvres canoniques. Elle est une invitation à l'humilité devant les textes, un refus de les ramener à ses propres préoccupations autocentrées. Elle est une exhortation à se laisser déborder, bousculer, scandaliser par des œuvres qui échappent parfois aux canons esthétiques, moraux, politiques, religieux du monde contemporain. Les textes les plus éloignés de nous, les plus loin de nos valeurs, ne devraient pas être pour nous les moins intéressants. Bien au contraire, la rencontre avec les œuvres devrait donner lieu à une expérience de vie, à une expérience du décentrement, à l'expérience de la liberté, plutôt qu'à une recherche du confort et à un refuge dans le magistère moral et dans l'autorité. La bibliothèque permet de viser au-delà de la littérature mondiale et de ses limites rassurantes, des limites qui dépendent de pures contingences historiques et qu'il serait souhaitable à présent de dépasser.

6月5日(日)
研究発表会プログラム

	第1セッション (10:30 - 11:35)	第2セッション (13:10 - 14:50)
A	語学/17世紀 5221 教室	19世紀② 5221 教室
	司会：杉山 利恵子（明治大学） 1. 思考動詞の否定文の補足節における叙法選択において、引き受けの果たす役割—フランス語コーパス Frantext と eslo の比較に基づいて 井上 大輔（上智大学大学院博士課程満期退学） 司会：御園 敬介（慶應義塾大学） 2. レ枢機卿の自己表象—マザリナードと『メモワール』を比較して 涌井 萌子（大阪大学大学院博士課程）	司会：三原 智子（群馬大学） 1. 二つのボヘミアン生活をめぐって：コレットと世紀転換期 伊藤 靖浩（東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員） 2. フローベール『感情教育』と男らしさ—決闘の場面をめぐって 森本 悠人（立教大学大学院・日本学術振興会特別研究員）
B	18世紀/19世紀① 5222 教室	19世紀③ 5222 教室
	司会：辻川 慶子（白百合女子大学） 1. 翻訳における「長さ」—18世紀から19世紀にかけて 菊田 怜央（東京大学大学院博士課程） 2. マネによる画家モリゾの一連の肖像画に見られる特徴—マネの他作品との相関性 松本 夏恵子（東北大学大学院修士課程修了）	司会：海老根 龍介（白百合女子大学） 1. 「悪」のモラル—白鳥の形象から読まれる詩の道徳性について 佐藤 陽介（早稲田大学非常勤講師） 2. 二人の幽霊—エロディアードとトゥリア・ファブリアナ 坂口 周輔（法政大学非常勤講師）
C	20-21世紀①/表象 5223 教室	20-21世紀③ 5223 教室
	司会：永井 敦子（上智大学） 1. ジュリアン・グラックの風景描写 佐藤 太郎（慶應義塾大学非常勤講師） 2. 他者性のセノグラフィ—ルイ・ジューヴェによるジャン・ジロドゥ古典劇の演出 田ノ口 誠悟（日本学術振興会特別研究員 PD）	司会：吉村 和明（上智大学名誉教授） 1. 単数にして複数なるものたちの系譜—ボンジュのマレブル論について 太田 晋介（大阪大学招聘研究員） 2. アンドレ・デュブーシェの手帖と詩作品—創作現場で捉えられるポエジー 山口 孝行（神戸大学非常勤講師） 司会：廣松 勲（法政大学） 3. 戦時下マルチニックにおける『トロピック』誌の戦略と詩学—地方性とエコポエティクをめぐって 廣田 郷士（日本学術振興会特別研究員PD）
D	20-21世紀② 5224 教室	20-21世紀④ 5224 教室
	司会：小黒 昌文（駒澤大学） 1. ブレースト『失われた時を求めて』のラシェルにおける動物愛護 松田 真里（関西大学非常勤講師） 2. ヴァントウイユの《ソナタ》をめぐる考察の継承—スワンの語り手の「私」へ 関野 さとみ（一橋大学大学院博士課程）	司会：松本 潤一郎（就実大学） 1. 悪魔の用法—ピエール・クロソウスキーにおける悪魔の分布と傾向から 後庵野 一樹（筑波大学大学院博士課程） 司会：有田 英也（成城大学） 2. 月と星—稲垣足徳とシモーヌ・ヴェイユ 今村 純子（立教大学非常勤講師） 司会：ローベル 柊子（東洋大学） 3. ミラン・クンデラにおける生と芸術作品 田村 知也（神戸大学大学院博士課程）

オンライン関連情報（参考）

今回の春季大会は立教大学での対面開催を予定しています。設備等の関係から、インターネットを活用したリアルタイムでのオンライン配信の併用（ハイブリッド方式）は予定していません。ただし、新型コロナウイルス感染症の再拡大等の理由により開催校で入構制限が出された場合は、全面的にオンラインに移行します。開催方式に変更が生じた場合は、できるだけ速やかに日本フランス語フランス文学会 HP にて告示するとともに、会員 ML で通知します。以下は、オンライン開催に移行した場合の概要（参考）です。

I. 大会までのご準備

- ・ウェブ会議システム zoom (<https://zoom.us>) を使用します。あらかじめ、ご使用の PC やタブレット端末等に zoom アプリ（無料版で可）をインストールしていただきますよう、お願いいたします（【参考】zoom PC アプリのインストールの方法：<https://zoom-japan.net/manual/pc/zoom-pc-app/>）。
- ・分科会発表要旨 PDF は、学会ホームページ (<http://www.sjllf.org>) にパスワードをかけてアップいたします（5 月下旬予定）。
- ・開会式、ワークショップ、特別講演、分科会、総会、閉会式、および賛助会員展示会場の zoom ミーティング情報（ミーティング ID、パスコード）、発表要旨閲覧用のパスワードは、事務局より事前に一斉メールでお知らせします。メールアドレスの登録がお済みでない会員の皆様におかれましては、これを機に事務局へのメールアドレスの登録をお願いいたします（メールアドレス登録：学会ホームページ＞「事務局より」＞「個人会員用 登録情報の変更」）。
- ・本大会の zoom ミーティング情報や発表要旨閲覧用パスワード、さらに分科会発表要旨（電子版）は、本会員のみのご利用とさせていただきますので、情報の取り扱いには十分ご注意ください。
- ・その他、オンライン大会にかかる最新情報は学会ホームページを適宜ご確認ください。

II. 大会当日の留意事項

参加者はすべて zoom 上で表示される名前（アカウント名）を学会登録名と同一のものにしてください（漢字・アルファベ・カタカナ可）。アルファベの場合は、RIKKYO Momoko のようにお願いします。

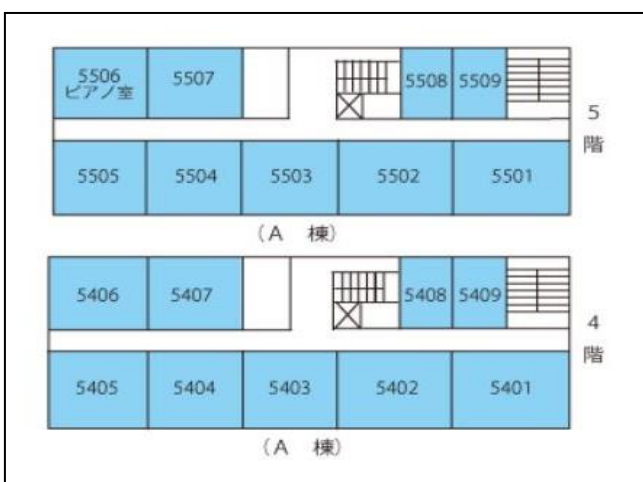
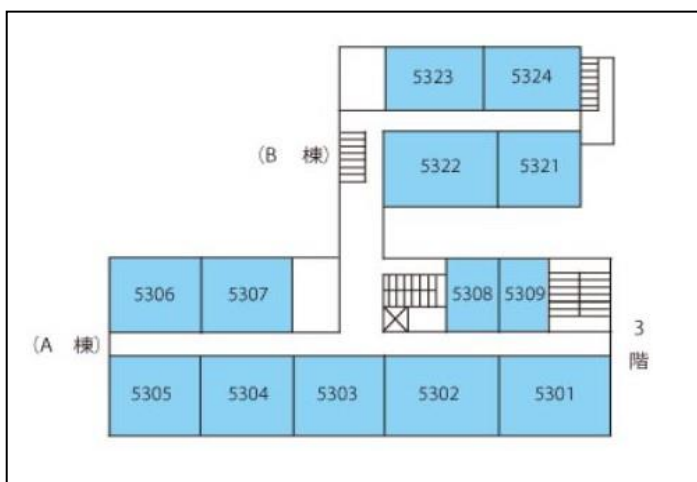
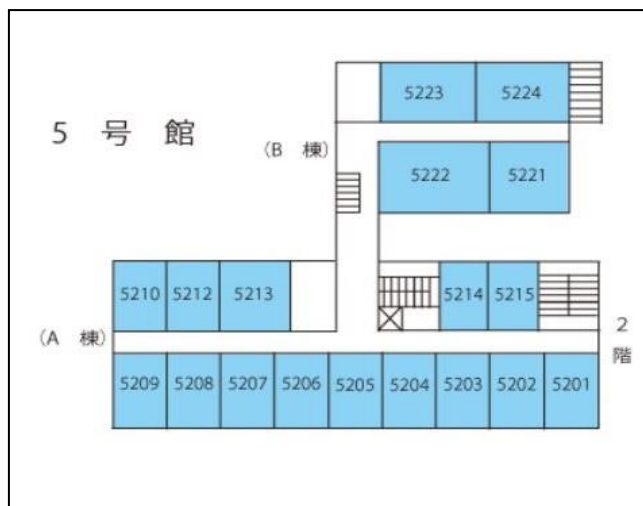
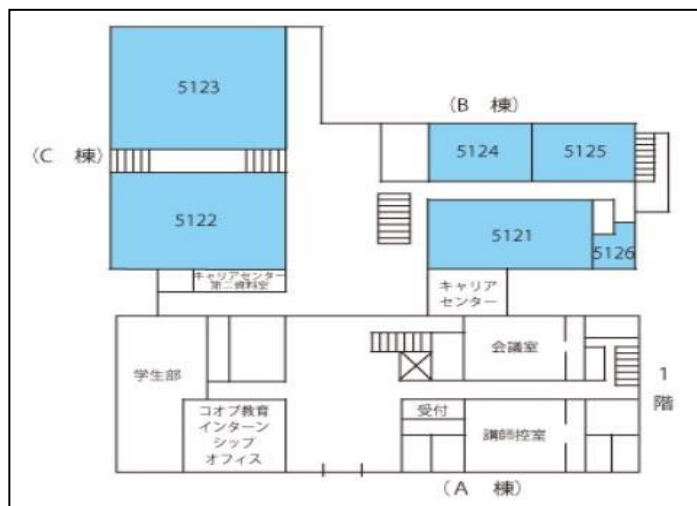
アカウント名の変更方法について

アカウント名が本人氏名ではない場合、以下の手順で本人氏名に変更をお願いします。

1. 画面下部にある“参加者”のタブをクリック
2. 名前欄が表示されるので自分の名前をクリック
3. 「名前の変更」ボタンが現れるのでクリック
4. 本人氏名に変更して完了

- ・接続にあたり登壇者および司会者以外はビデオオフ、マイクミュートの状態でご参加ください。
- ・録音や録画、スクリーンショット撮影等を行ったり、許可なく配信・転送したりすることはお控えください。

研究発表は 1 件につき 30 分（発表 25 分＋質疑応答 5 分）です。今回、各発表の間に 5 分間のポーズを設けておりますので、2 番目の発表は分科会冒頭から 35 分後の開始、3 番目の発表は 70 分後の開始となります。司会者は、開始時刻に十分ご注意ください。



6月4日(土) 10:00 - 12:00 研究会

パスカル研究会	太刀川記念館 1階 第1・2会議室
自然主義文学研究会	12号館地下 第3会議室
日本カミュ研究会	12号館 2階 会議室
日本フランス語学会	5号館 1階 5125 教室
日本クロードル研究会	5号館 2階 5204 教室
日本ジョルジュ・サンド研究会	5号館 2階 5205 教室
バルザック研究会	5号館 2階 5214 教室
日本マラルメ研究会	5号館 3階 5308 教室
フロバール研究会	5号館 4階 5408 教室
バタイユ・ブランショ研究会	5号館 4階 5409 教室
日本ブレスト研究会	5号館 5階 5507 教室
ラブレー・モンテーニュ・フォーラム	5号館 5階 5508 教室

6月4日(土) 役員会・委員会

幹事会・役員会	太刀川記念館 3階カンファレンスルーム
学会誌編集委員会	12号館地下 第1・2会議室
渉外委員会	ロイドホール 5階 第1会議室
語学教育委員会	ロイドホール 5階 第2会議室
広報委員会	ロイドホール 5階 第3会議室
研究情報委員会	5号館 2階 5206 教室

* 太刀川記念館

12号館

ロイドホールへは

タッカー門からお入りください。

地下鉄 東京メトロ

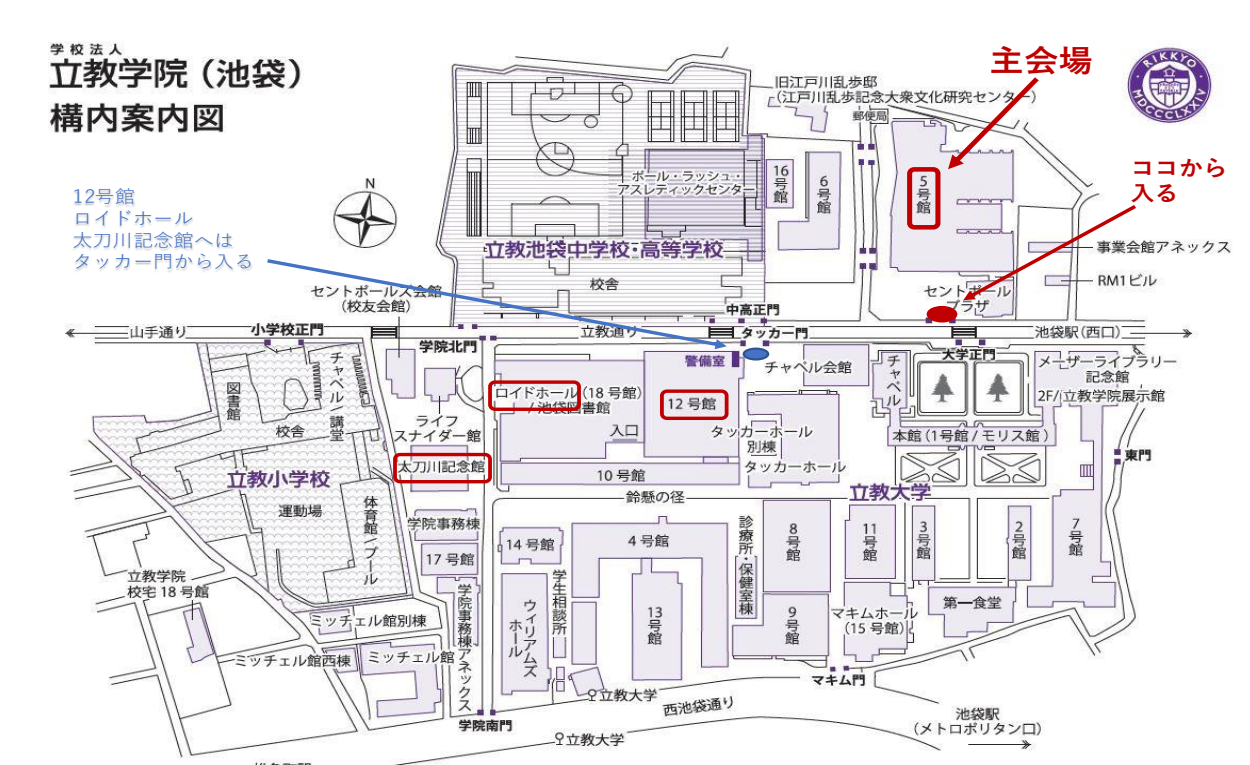
丸ノ内線／有楽町線／副都心線 池袋駅西口より大学正門まで 徒歩約 10 分。

有楽町線／副都心線 要町駅6番出口より大学正門まで 徒歩約10分。

JR／西武池袋線／東武東上線

JR／西武池袋線／東武東上線

池袋駅西口より大学正門まで 徒歩約10分。



(メモ)